

静嘉堂文庫本『源氏露』をめぐる

中葉芳子

はじめに

本稿で取り上げる静嘉堂文庫本「源氏露」は、「源氏物語」の巻名や巻の内容を詠み込んだ、伝定家作「光源氏巻名歌」に解説を加えたものである。今、実例として、この「光源氏巻名歌」を「藤原定家全歌集」^註によって引用してみると、

源氏物語巻名和歌

桐壺のうち笑み顔の面やせてをかしはつかし花鳥の聲
は、き、や君か伏屋のとなつに袖うちはらふ菊のたきもの
空蟬のうつこをのそく手習の文にはあらてぬる、袖哉

(中略)

蜻蛉の手にもとられぬ琴のねのねたましけなる物はかなさよ
手習のうつ碁を見る小野の山をちなる里は宇治の山ひこ
見し夢の浮橋渡すのりの師は思はぬ山に罪をされとや

のように、この伝定家作の巻名歌は、五十四帖の巻名を初句に詠み込んでいる。なお、この巻名歌について詳しく考察された寺本直彦氏は、定家作という伝は否定すべきであり、「源氏物語」の各巻の連歌の寄合を詠み込んだ後代の作である、と結論づけられておられる。

さて、本稿では、この伝定家作「光源氏巻名歌」の注釈書の一本として「源氏露」を取り上げるわけだが、これと関わりを持つものに、「山頂湖面抄」「源氏増鏡」^註などがあるが、これらが「光源氏巻名歌」の注釈書であると同時に梗概書としての性格も合わせ持っているのに対して、「源氏露」の叙述態度には注釈書とも梗概書とも言い切れない面があり、秘伝めかした講釈とでも言うべき性格のものであって、中世における「源氏物語」の享受資料として無視できない内容を持っている。

一、「源氏露」の書誌と構成

静嘉堂文庫本「源氏露」は、「大日本国語辞典」編者松井簡治博士の旧蔵本である。縦二二・七センチ、横一五・八センチ。枠取りした一八行および二〇行の罫紙を袋綴にした一冊本。異付一二丁。表紙左上に貼られた題簽に「源氏物語歌註 全」と外題を記しているが、本文とは別筆であり、後補されたものだと思われる。内題はなく、冒頭の料簡の部の後に「源氏露井目録」、本文の宇治十帖の始めに「光源氏肝要巻名下」とあり、「源氏露」もしくは「光源氏肝要」が本来の書名の可能性もある。本稿では便宜上「源氏露」という呼称を用いる。書写年代は江戸時代の後期であろう。

奥書は一丁オモテに書かれている。

書置もかたみになさんためなれや
我かすみ虫喰のかはらんにつき

(一行空白)

慶長元年

六月吉日思立候て令書訖

幽斎

判

この奥書をそのまま素直に信じるとすれば、「源氏露」は細川幽斎

が慶長元年（一五九六）六月に書かせたものである、ということになる。しかし慶長に改元されたのは十月二十七日で、六月はまだ文禄五年であったことを考えると、この奥書の信憑性に疑問を抱かざるを得ない。この奥書は細川幽斎に仮託した偽奥書であろう。

さて、「源氏露」の構成は、始めに「一此物がたりをげんじとなづくる事」「一物がたりづくりいだせるおこりは」「一むらさきしきぶは」などで始まる料簡が置かれている。この料簡は「岷江入楚」の料簡と類似する点が多くみられるが、「岷江入楚」は諸注を集成した注釈書であるし、室町末期の三条西家周辺で成立した注釈書には料簡の立て方や表現などに共通する部分が多いので、直接の影響関係を断定することはできないが、何らかの影響があると見てよからうか。

前述したように、この料簡の部の次に「源氏露井目録」として巻名目録が置かれている。この巻名目録の特徴としては、並の巻を設けていること、若菜下巻を若菜上巻の並として置いていること、雲隠巻を一巻として扱っていること、宇治十帖を本篇とは別に数えていること、があげられる。こういった特徴は、「源氏小鏡」や他の「光源氏巻名歌」の注釈書などには共通している。

巻名目録をあげた後、本文が始まる。

きりつほのうちあみがほのおもやせて

をかしばつかし花とりのこゑ

「打あみがほのおもやせて」と云は、源氏の御事也。おさなく
ていつくしきをいへり。又「花鳥のこゑ」と云は、引哥の心な
り。「おかし」と云は、ほめたる事也。(後略)

ここに引いた桐壺巻を例として説明すると、まず「一桐壺」と、巻
名目録で付された巻序を表わす数字と巻名を記す。そして巻名の下
に二行割注の形で、光源氏の年齢(第三部においては薫の年齢)と
当該巻の季節や月を記して年立としている。例えば花宴巻では、

五花宴

此巻は源氏十九さいの三月の事を
書たる也

のように記されている。ただしこの年立は、桐壺・帚木・空蟬・鈴
虫・雲隠・夢浮橋の各巻では記されていない。

次に伝定家作「光源氏巻名歌」を上句と下句で二行に分ち書き
にして記す。この巻名歌を雲隠巻は持たず、蓬生・初音の両巻では
欠落している。また若菜下・柏木の両巻の場合は、巻名歌の諸本に
は、

若菜の下臥まち月の夜明をこひのやまちや女なるらむ

柏木のかほるは袖か世の中に猶こりすまの煙くらへは

とあるが、この「源氏露」では、

わかなの下ふし待月の夜おとこをなをこりすまのけぶりくらべ

に

柏木のかほるは袖か世の中の窓の山路はおんななるらん

となつていて下句が入れ替わっており、歌の解説においても下句が
入れ替わった形で記されている。

巻名歌を記した後、この巻名歌を解説するという形の叙述が始ま
る。「打あみがほのおもやせてと云は」「花鳥のこゑと云は」「おか
しと云は」などと、巻名歌に詠み込まれている語句を取り上げて解
説をしていくのだが、この叙述態度や内容には様々な特徴が見られ
る。以下、それら特徴的な叙述を取り上げてみていこうと思う。

二、叙述の態度

『源氏露』が『源氏物語』本文の梗概をまとめる際に、本文の事
実を間違っていることが少なからず存在する。例えば明石巻には、
(前略) 扱源氏も住吉の明神に掃京の事を折給ふ故に、太後の
夢にこ院みえさせ給ひて、「とがなき君を浦人とすて置給ふ事、
ひとへにうらめしき事なり」と、御気色あわたしくおそろしく
みえさせ給へば、其より后夢打覚て、胸うちさはぎおそろしく
おほしめして、御門に申て源氏をめしかゑされべきよし、申さ
せ給ふ。(後略)

とある。「源氏露」では、弘徽殿太后が故桐壺院に夢で責められて恐ろしくなって、光源氏の都への召還を帝に積極的な働きかけた、という理解をしている。しかし「源氏物語」本文では、弘徽殿太后は、光源氏を明石から都へ呼び戻したい、という朱雀帝の考えに強硬に反対していたはずである。また横笛巻には、

(前略) 大将我がやかたにかえり給ひて、すこしまどろみまします。御夢に柏木右衛門、有しながらの姿にて、「誠や、一条のみやす所より、笛給り給ひけるや。此笛は代々につたへて御門御ひざう成しを、右衛門のかみは笛のきよらなり、との給ひて、我にくだされし所はいとめんほく也。此笛はむかしやうぜい院、ことに御ひざう有けるよし、つたへき、ける」とて、かり衣の袖をかほにあて、哥に、
 笛竹の吹よる風のことならば
 すゑのよながき音につたへなむ

とよみて、(後略)
 とある。

一条の宮を訪れた夕霧が、一条の御息所から柏木遺愛の笛を贈られた後、帰宅して三条殿で見た夢である。「源氏露」では、夕霧の夢に現われた柏木が、笛の由来を語り和歌を詠んだ、という理解をしている。しかし「源氏物語」本文では、柏木が夕霧の夢に現われ

て和歌を詠んだことは事実だが、柏木は笛の由来について語っていないのである。笛の由来を夕霧に教えた人物は光源氏なのである。こうした「源氏物語」本文とは違った梗概がまとめられるのは、「源氏露」が梗概化する際に勘違いをした可能性もあるのだが、勘違いというよりも、「源氏露」が依拠した資料が既にこのような梗概化をしていたとは考えられないだろうか。

このことは、「源氏物語」本文からは考えられない叙述が「源氏露」に見られることから言える。例えば紅葉賀巻に

(前略) 朱雀院より源氏をせめたまひて、「からの舞をまひ給へ」とぞおほせられける。此心は、昔源氏かうろくはんにて、からの人舞をおしへ奉る時、大國の舞をおしへ奉る。源氏やがてうけとり給ひて、なひ／＼に御けいこあり。此舞はたぐあなきよしなり。いまだ御門の御前にてはまひたまはざりければ、彼もみぢの賀をおもひたちたまひて、源氏の舞を見んとぞもよほされける。御門のせんじそむきがたきによりて、げんじもまはんとの御心あり。(後略)

とあるが、「源氏物語」本文には、光源氏が鴻臚館での唐人から舞を教わった事実はない。しかし同様の叙述は花散里巻にもある。

(前略) 桐つほの御門の御時、唐人参りて大國のきよくをまふ也。かうろくはんにおゐて彼舞を唐人にまはせて、御門御らん

じてまひらんありて、其後源氏に彼舞を唐人おしへ奉る也。此舞を取得し給ひて、紅葉の賀の巻に、頭中将と左右をあらそひて青海波を舞給ふ。(後略)

「源氏物語」花散里巻の本文には舞に関わる場面はないので、「源氏露」が唐の舞について叙述すること自体、「源氏物語」本文からは考えられないことである。先に引用した箇所が続く花散里巻の叙述には、

(前略) さて女三の宮に女がく、と云し事は、彼やうきひと勝陽仁との天人の舞をうつして舞給ふきよくを、女がくとはいあり。源氏、女三の宮におしへ給ひて、女三の宮と左右を舞給ふを御門御らんじて、「世はありがたし」とほめ給ふは、此事也。

花ちる里は此舞を度々源氏にならひ奉らんとありけれども、つゝにおしたまはず、と家隆のせつにはちふせり。定家は、此きよくをならひて御かども后にも舞て見せ奉り給ふ、といあり。

(後略)

とあり、女三の宮、花散里といった女性まで唐の舞と結びつけられている。これらの叙述は「源氏露」の創作ではないか、という疑問も生じるほど、「源氏物語」本文と考え合わせると奇妙なものではあるが、中世において語り継がれていた「源氏物語の世界」を反映していると考えた方がよさそうである。

現在知られている断片的な秘説などからは、現存の「源氏物語」本文とは異なる「源氏物語の世界」が存在したことや、その別伝の物語世界が共有されていたことが、既に指摘されている。^{註七}

また先に引用した花散里巻にも見られたように、定家や家隆の名を持ち出しているのも、この「源氏露」の特徴である。例えば明石巻では、

(前略) さて明石に「とはすがたり」と申は、入道、娘の事を夢に見て源氏に語り申を、「とはすがたり」と家隆はちうせり。定家は、源氏、明石の上にあひ給ふ事、およその口より紫の上のきき給はぬさきにとて、明石より御文にて紫の上へ申させ給ふを、「とはすがたり」と云ともいへり。(後略)

とあり、「問はず語り」について、定家や家隆の説があつたかのような叙述がなされている。また松風巻にも、

(前略) 又かつらに「隠家」と云事有。源氏こ院の御ために、かつらとさがに御だふをたて、月に三度づ、參給ふ。是を「かくれ家」と二条家には申。又小鷹がりのつゝめでに天上人渡り給ふに、「隠家見あらはさる」と、源氏のたはふ事チにのたまひけるは、たゞかつらのやかたのことを紫の上にかくしだてたてまつらんとて、「かくれが」との給ふと六条家にはちうし給ふ也。(後略)

とあり、「かくれが」について、二条家と六条家にそれぞれの説があつたかのような叙述がなされている。このように『源氏露』では、定家、家隆、二条家、六条家、藤原公任などの説と称するものがあげられているが、いずれもそうした説が存在したことは事実として確認できない。古い時代からあつた説を自分が受け継いでいるというポーズを示し、權威付けしていると考えられるのである。

定家や家隆などの説と称するものによって自己の權威付けをおこなうのは、秘説を授けるという立場でおこなわれていた歌道伝授と共通する方法である。その歌道伝授との関わりの中で成立した注釈の代表が中世古今注であり、『源氏露』には中世古今注との関連が考えられる。例えば末摘花巻には、

(前略) 引哥に、

君を置てあだし心をわれもたば

末の松山なみやこまなむ

此哥の心は、ある人、都よりみちのくへくだりけるに、其国にて妻をまふる間、みち／＼つれて行ま、に物語して、「我中契りのふかき事、いきてかぎりやはあるべきかは」といひければ、男いひけるは、「あの松山を波のこさん時はわかれなん」と云ければ、契りのはてしや来けん、いづこともなき波たちきて、彼松山を打こす間、おもひながらわかれんとす。男は都に

のほる。女はゆきかたしらずとかや。(後略)

とある。引歌としてあげた『古今和歌集』一〇九三番歌について、その背景に存する本説を記しているのである。和歌の注釈をする際に、明らかでない点について本説によって説明しようとするのは、中世古今注が得意とする方法なのだ。例えば『毘沙門堂本古今注』では、

(前略) 松山ノ浪ヲカケト云ハ、昔或人陸奥守ニテ下リケル時、ハルカナル末ノ松山ヲ見ヤリテ、夫婦ノ契ニサシテ云ケルハ、「アノ山ニ浪ノコエム時ニ、一人ノ中別ベシ」ト云リ。或時見レバ浪更ニコエケリ。夫婦云、「我等ガ云シ事ナレバ無力」トテ、即離別シテ、男ハ京ヘノボリ、女ハトマリケリ。(後略)

とある。こうした本説の類似からも、『源氏露』が他の中世文化と同様に、中世古今注の影響を受けていることがわかると思う。

以上みてきたように、『源氏露』の叙述からは、中世において語り継がれていた「源氏物語の世界」や、中世文化に強い影響力を持っていた中世古今注、これらの影響を受けていること、言い換えれば、こういった知識や資料が『源氏露』の叙述の基盤にあることが認められるのである。

三、連歌的教養との関わり

先にも述べたように、伝定家作「光源氏卷名歌」は、一首の中に当該巻の連歌の奇合を詠み込んだ和歌である、とされている。ゆえに「光源氏卷名歌」自体に、既に連歌及び連教師との関連が考えられるのであるが、ここでは「源氏露」の叙述内容から、「源氏露」が基盤とした知識や資料には連歌的教養に関するものもあつたことを確認していくことにする。

「源氏露」には、「源氏物語」の梗概書であると同時に連歌の手引書でもある「源氏小鏡」の影響が指摘できる。例えば空蟬巻の叙述に、

(前略) 軒ばの萩と申は、源氏一夜の物語りばかりにて、又ともあひ奉らず。軒ばの萩うらみ奉るよし聞給ひて、源氏より御ふみあり。哥、

ほのかにも軒ばの萩を結ばずは
露のかごとをなにかけまし

返哥、

ほのめかす風につけても下萩の
末は露にうちしほれつ、

とよみしゆへに、此人を軒ばのおぎ共云。又下萩共云也。

とあるが、この光源氏と軒端の萩との贈答は、「源氏物語」本文では、軒端の萩が藏人の少将を婿取りした夕顔巻で交わされたものである。それが「源氏露」や「源氏小鏡」では、空蟬巻にまとめて梗概化されているのである。このように巻を越えて関連事項をまとめることは、巻の枠よりも話としてのまとまりを重視した梗概化をする際に、よく用いられる方法である。「源氏露」がこのような梗概書の方法を取り入れていることから、連歌の手引書でもある「源氏小鏡」に関心があつたことがわかる。

また「源氏露」には「連歌」という語が使用されている。葵巻に、(前略) 連歌に、すだれとみすは心を分て男女につけべきなり。かわりめあるべきなり。

とあり、松風巻に、

(前略) 引哥に、
大井川入江にたてる花す、き
つりするあまの袖かぞと見る

海にこそ「あま」とはあれ、川に「あま」とあるとよむ哥まれ也。「人連哥に付たり共、あらそふべからず」とかうこんの申状にか、れたり。げにめづらしき事也、とおもふべし。(後略) とあるように、これらの叙述はどちらも連歌の付合に関するものである。

また「連歌」という語は用いていないが、寄合の解説や付合について注意をうながすというような連歌に関わる叙述もある。

例えば花宴巻には、

(前略) さて三のくちにて、わかれしかたみにとて扇をとりかへ給ふ也。内侍のかみの扇の絵は、桜のみえがさねに、かすめる空の月を水にうつしたるふぜひなり。これを「形見の扇」といへり。(後略)

とある。「形見の扇」ではなく「あふぎ」としてだが、「光源氏一部連歌寄合」^註「光源氏一部連歌寄合之事」^註「源氏小鏡」などに、花宴巻の寄合としてあげられている。

また藤裏葉巻には、

(前略) 又「をるやかつらのもろ恋もかな」とよむは、引哥の心也。このいわれによりて、雲井のかりと夕霧には、「もろ恋」と付たり。たがひに心をつくしたるふぜひを付べし。(後略)

とある。「もろ恋」は、「光源氏一部連歌寄合」において、藤裏葉巻の寄合としてあげられている^註。また「たがひに心をつくしたるふぜひを付べし」という叙述は、連歌の付合の際に注意をするべき点を記したものである。

こういった叙述からは、「源氏露」が連歌に必要とされる知識について関心を持っていたことがわかる。ただし「源氏露」は「源氏

小鏡」や連歌の寄合書などとは違って、連歌を詠むための手引書ではないことから、寄合など連歌に関する叙述もそれほど多くはなく、教養の一つとしての意味合いが強くなっているのである。

次に現存の「源氏物語」本文には存在しないが、中世連歌師の知識の一つであったと考えられる「巢守」についての叙述も見られることを注意しておきたい。

例えば御法巻には、

(前略) 彼大将の君と申は、むかし野分の朝に、紫の上、はしらがくれにおはします御姿を見奉りて、世にもかかる人はおはしける、と思ふより忘奉らず。今をかぎりの御姿を見奉て、さしておよびはなけれ共、なきがらにわがたましみのしみ入心地して、後までも忘給はず。是をすもりの上巻に哥合の部にさしたり。(後略)

とある。

この他にも、花散里巻に「すもりのちふに、三位といふ人申き」、須磨巻に「すもりのちふに、くはしくさたす」、橘姫巻に「何れも此事、すもりに書あらはすなり。」とあるので、「すもり」や「すもりのちふ」が存在したことについて、「源氏露」が疑っていないことがわかる。「巢守」については、正統な研究書では触れられないが、源氏物語百系図の一部には「巢守の三位」という人物が載せら

れており、「巢守」が「源氏物語」の一部として認識されていた時期や世界があったことは明らかにされている。

また連歌師宗砌の「古今連談集^三」にも、

(前略) すもりの三位がちうきしよには、閨白と書ておほきさきの宮とよみたり。撰政と書て大御かど、よみたり。(後略)

(前略) 照もせず曇りも果ぬ春の夜の随月夜にしく物ぞなきとずんじ給へり。下心には、たいしやくのおはしますきげんぢやうと云所の空の月は餘り面白して、照こともなく曇ることもなくあれば、其都をばとそつのないあんとも申つべきを、今の御代に至りて、折にあひたる面白しとて、照もせず曇りも果ぬ月とずんじ給たるを、大将も此心なりと立き、し給ひし情の色あらはしたり。其ことをすもりの三の第三番、なつかしき歌に書顯したり。花の下の随月夜は、かすむとも面白かるべし。いはんや君もひとも身をあはせたる花の色也。桃李ものいはず共、をのづからふんくたる路中のかんばしき、前代未聞也。大将も詠残し給へり、と書たるは、彼きげんぢやうの春を思召寄たるか、とうたがひたり。(後略)

とある。この記述からは、「すもりの三位がちうきしよ」や「すもりの三の第三番、なつかしき歌」が知られていて、これらを連歌の句評において用いることができたほど、当時の連歌師の間では一

般化していたことがうかがわれる。

稻賀敬二氏は、「古今連談集」が書かれたと思われる文安頃には、連歌師の間で、「巢守の三位」が「源氏物語」に関する知識の一つとして扱われていたのだろう、と述べておられる^三。要するに当時の連歌師の「源氏物語」に関する知識の中には、正統な研究書では扱われないような特異なものも含まれていたのである。「源氏露」はこのような連歌師の特殊な「源氏学」の影響をも受けているのである。

「源氏露」が連歌的教養について関心を持ち、連歌的教養に関する知識や資料を基盤としていることは、以上のように明らかなのである。

むすび

以上、「源氏露」の基盤には、「源氏物語」の秘説の背景にある世界、歌道伝授、連歌的教養と関わる知識や資料があることが確認された。

しかし先に述べたように、奥書によって、その著述を細川幽斎に付会しているということは、「源氏露」の成立年代が細川幽斎が没してからであることを暗示していることになる。

細川幽斎は慶長十五年（一六一〇）に没しているので、この「源氏露」は少なくともそれ以降、おそらくは江戸時代初期に、最後の連歌師と言つてよいような人物によつてまとめられたのではないだろうか。先に見てきたような様々な連歌の教養が本書の基盤にあることを思うと、連歌師としての知識と資料を持つてゐる人物を著者に想定するのが自然だからである。

江戸時代に新しい文芸として俳諧が隆盛にむかう中で、連歌師と呼び得る人は消えつつあつたとはいへ、俳諧においても連歌師達を持つ伝統的な古典知識は身につけるべきものであり、不可欠な知識であつた。こうした時代の流れの中で、「源氏露」は連歌師達の持つ伝統的な古典知識を必要とする人々の要請によつて作られたのではないか、と私は思う。

本稿では、現代の「源氏物語」からは考えられないこの種の中世の連歌師達の特殊な「源氏学」が、江戸時代の初期頃まで力を持つていたことに目を向けるとともに、「源氏物語」の正統な研究書としての評価を与えることができないこの「源氏露」が、中世の連歌師達の特殊な「源氏学」を伝える最後の資料であることを確認し得たと思う。

〔注〕

一 冷泉為臣編「藤原定家全歌集」（昭和十五年 文明社）

二 寺本直彦「源氏物語受容史論考」（昭和四十五年 風間書房）

前編第二章第三節

三 注一同書 前編第二章第七節

四 「源氏露」という書名については、寺本直彦「源氏物語論考

古注釈・受容」（平成元年 風間書房）第一部第一章で触れられてゐるように、「源氏物語」の注釈を意味すると思われ

五 こうした和歌は室町時代のものの奥に多く見られる、書写の

功に対する感懐を述べて後人の結縁を願うかと思われるものと同じであろう。池上禎造「もしほぐさ——文字史への一頁

——」（『国語国文』第二十卷第七号 昭和二十六年九月）

参照。

六 「源氏露」の引用では、私に濁点、句読点を付した。

七 伊井春樹「源氏物語一部之抜書并伊勢物語」解題および翻

刻（紫式部学会編「源氏物語の思想と表現 研究と資料

——古代文学論叢第十一輯——） 平成元年 武蔵野書院

八 「未刊国文古註釈大系 第四冊」により引用した。なお、濁

点、句読点は私に付した。

九 『良基連歌論集三』(昭和三十年 古典文庫第九十二冊)に

よる。

一〇 注九に同じ。

一一 「もろ恋」は、『光源氏一部連歌寄合之事』『源氏小鏡』においては、少女巻で寄合としてあげられている。

一二 『宗砌連歌論集』(昭和二十九年 古典文庫第八十五冊)に
よる。

一三 稻賀敬二「宗砌とその前後——句評に『巢守の三位』が登場する背景——」(金子金治郎編『連歌研究の展開』昭和六十年 勉誠社)

なお本稿は、平成八年九月十四日、梅花女子大学にて行われた関西平安文学会第十六回例会における発表に基づくものです。伊井春樹先生はじめ、御教示を賜りました諸先生に心から御礼申しあげます。

(なかば よしこ 関西大学院生)